大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

喜劇　Die Juden（上）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 次郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017499

喜劇 *Die Juden*（上）

南　次郎

（1）

はたちの年，1749年に，レッシングは5作目の喜劇として，ひと幕もの『ユダヤ人たち』をかいた．

ユダヤ人の風体をしたふたりの男に，男爵がおそわれる．かれも，世間なみに，ユダヤ人ぎらいである．つじ強盗はユダヤ人だと，みんなが信じてうたがわない．男爵を救った旅人が，犯人たちの正体をあばいてゆく．犯罪人たちは男爵家の執事と領地内の村長だった．そして，ゆきずりの危険に身をなげた男こそ，ユダヤ人だったのである．男爵は偏見を恥じる．

犯人が露見してゆく過程に，この喜劇の滑稽さをみとめ，Enthüllungsdrama, Entlarvungsdrama のひとつとして，たとえば，クライストの『こわれがめ』の類にかぞえいれることも可能ではあろう．あるいは，先入見と真実との落差の大きさに，喜劇性をみるひともいるかもしれない．しかし，露見の過程も，落差の大きさも，プロットにかかわる喜劇性は，ここでは，ひきおこされた葛藤の深刻さと，作者による風刺の断念とによって，かき消されてしまう．

（2）

たしかに，この喜劇もおかしさに不足はしない．第1場で，クルムとシュティッヒが強盗計画の失敗についてはなしあっている．

„Martin Krum: Du dummer Michel Stich!
Michel Stich: Du dummer Martin Krumm!
Mart. Kr.: Wir wollens nur gestehen, wir sind beyde erzdumm gewesen. Es wäre ja auf einen nicht angekommen, den wir mehr todt geschlagen hätten!
Mich. St.: Wie hätten wir es aber klüger können anfangen? Waren wir nicht gut vermummt? war nicht der Kutscher auf unsrer Seite? konnten wir was dafür, daß uns das Glück so einen Querstrich machte? Habe ich doch viel hundertmal gesagt: das verdammte Glücke! ohne das kann man nicht einmal ein guter Spitzbube seyn.
Mart. Kr.: Je nu, wenn ichs beym Lichte besehe, so sind wir kaum dadurch auf ein Paar Tage länger dem Stricke entgangen.
(略)
Mart. Kr.:... Und an dem verzweifelten Fremden, der uns so einen fetten Bissen aus dem Munde gerissen hat, will ich mich gewiß auch rächen. Seine Uhr soll er so richtig müssen da lassen – – Ha! sieh, da kömmt er gleich. Hurtig geh fort! ich will mein Meisterstück machen.
Mich. St.: Aber halbpart! halbpart!"

まぬけ野郎 (Du dummer), ぬすと (Spitzbube), いまいましい (verdammt, verzweifelt), 山わけ (halbpart) など, 方言をまじえての低俗な言葉. 社会下層部の生活のなかに, 息づいている飾りのない比喩表現, 「運がわれわれにこんな斜線をひいた」 (das Glück machte uns so einen Querstrich), 「われわれは縄をのがれた」 (wir sind dem Stricke entgangen), 「あんなにふとった獲物をわれわれの口からかっさらったよそ者」 (der Fremde, der uns so einen fetten Bissen aus dem Munde gerissen hat).

市民劇場の舞台に, 農民のすがたが登場するだけで, すでに, 失笑をよぶ当時にあって, ここでは, 農民たちがとんまな失敗をしでかし, それを仲間うちの言葉であからさまに表現しているのである. 観客の優越の笑いは, さ

らにくすぐられる．

しかし，農民とて上層の人たちをまえにしては，威厳をみせないわけにはいくまい．（第２場）

「マルティン・クルム：…旦那様，まったく精励な召使いでありまして－－わたくし，名はマルティン・クルムと申しあげ，ここの当領地にありましては，身分のたかい執事でございます．

旅人：そうでしょうとも．ところで，わたしの従僕をみかけませんでしたか．

マルティン・クルム：あなたさまにおつかえする．いいえ，でも，わたくしは貴方様の賛美すべきお人柄について，とてもたくさんよいことをお耳にする栄誉をもちました．したがいまして，あなたさまとお知りあいになることの栄誉におあづかりする栄誉をもちますことは，わたくしのよろこびとするところであります．噂によりますれば，あなたさまは昨夕わたくしどもの主人を，道中，とても危険な危険から，お救いくだされたとのことでございます．主人の幸運をよろこびとすること以外に，さしあたり，なにも手につきかねますので，わたくしはよろこんで－－」

„Mart. Kr.: ... -Ganz dienstwilliger Diener, mein Herr, – – ich werde Martin Krumm heissen, und werde, auf diesem Gute hier, wohlbestallter Vogt seyn.

Der Reisende: Das glaube ich Euch, mein Freund. Aber habt Ihr nicht meinen Bedienten gesehen?

Mart.: Kr.: Ihnen zu dienen, nein; aber ich habe wohl von Dero preiswürdigen Person sehr viel gutes zu hören, die Ehre gehabt. Und es erfreut mich also, daß ich die Ehre habe, die Ehre Ihrer Bekanntschaft zu geniessen. Man sagt, daß Sie unsern Herrn gestern Abends, auf der Reise, aus einer sehr gefährlichen Gefahr sollen gerissen haben. Wie ich nun nicht anders kann, als mich des Glücks meines Herrn zu erfreuen, so erfreu ich mich– –“

精励な（dienstwillig），身分のたかい（wohlbestallt），貴方の（Dero），賛美すべき（preiswürdig），栄誉（Ehre），よろこびとする（sich erfreuen）と古風な語や上品な言葉をならべ，まわりくどい表現で，話の格調をたかめようとする．だが，クルムの意図した効果はうまれない．むしろ，お化粧にはげむめす猿のように，教養の低さがいよいよ露呈される．なにがいいたいのか，どのようにいえばよいのか，かれ自身にもわからなくなる．爆笑がおこる．旅人の簡潔な話しぶりと対照をなして，そのおかしさのほどがきわだつ．

「旅人：あなたののぞんでおられることはわかります．つまり，わたしにお礼を申したいというのですね．ご主人の力になってさしあげたことで．

クルム：ええ，まったくおっしゃられるとおりでございまして，それなんですよ！」

他方で，レッシングは真面目な言葉や主張を組みあわせて，笑劇の状況さえ形づくろうとする．

事件があって，夜があけた．旅だちたいとおもうのに，従僕のクリストフがいない．（第4場）

「旅人：おってほしいときに，いつも，一時間もさがさなくてならないとは．

クリストフ：ご冗談を，旦那さん．ある場所にかけつけることのほかに，わたしにできることでもあると，いうのですかい．それじゃ，あんたがこの場所にいないことだって，わたしのせいだと，いうのですかね．わたしのいるところにゃ，どこだって，わたしがみつかりますよ．」

あるいは，この朝，クリストフはへべれけに飲ん（besaufen）でいるのだが，ただ飲んだ（trinken）にすぎない，といいはる．trinken の内容が明らかになるにつれ，地ブドウ酒が数本，ウイスキーがグラスに数杯となり，

besaufen どころでなくなる．事実，酔っぱらいの長口舌に，場はふくらんでいく．口舌のさなかにあっても，それぞれの言葉，それぞれの主張におかしさはない．それらが組みあわされるとき，あまりに明白な論理の逆転が生じ，滑稽な状況が現われでる．

滑稽な状況を，観客の視覚に直接につたえる場面も設定される．クルムはシュティッヒとの約束にしたがい，旅人の時計をかすめなくてはならない．(第2場)「ならずもの」，「かたり」，「泥ぼう」，「つじ強盗」と，クルムはユダヤ人を中傷しつつ，かれらが「盗むとなると，そのすばやいこと，雄牛のようにすばやいんですよ…たとえば，旦那様，まず，かれらはだれかに近づいていきます．わたくしが，いま，あなたさまに，ざっーとこんなぐあいに－－」旅人の上衣のポケットに手をはしらせ，最初に，嗅ぎタバコのケースをぬすむ．「かれらがタバコ・ケースのことを話題にするときは，まずまちがいなく時計をねらってのことですし，時計について話しているときには，かならず，タバコ・ケースをぬすもうとかんがえてのことなのです．」いいつつ，きわめて慎重に時計をつかむ．そのとき，「じっーと！じっーとしたまえ！ここできみの手はなにをさがしているのかね．」クルムの手はおさえられる．愚者の賢者への挑戦は，観客の目の前で，みごとに失敗したのである．

第16場で，旅人はなくしたタバコ・ケースのことを，クルムにたずねる．ケースはすでにクルムの手もとにはない．求愛のしるしとして，クルムから男爵家の侍女，リゼッテにわたっていた．旅人の問いに，いつになく，クルムは興奮する．「わたしがもっていると，かんがえるなら，さわってみればよい．－－わたしをしらべなさい．」当惑して，旅人がその任にないことを，つげるとき，クルムは居丈だかに，かち誇って，ポケットをひとつ，ひとつと裏がえしてゆく．そして，3つめのポケット．そのとき，ユダヤ人を仮装する大きなひげがふたつ，観客の目の前に落ちる．群衆の注視のなかで，礼装の美人が尻もちをついたときのように，意想外な過失がころびおち

たのである．

ことばの動き，状況，場面のなかに，機知にみちたおかしさ，滑稽さがあふれている．滑稽の原因とその現われかたの把握，ゆたかな機知において，レッシングは *Der junge Gelehrte* (1747 年)，*Damon, oder die wahre Freundschaft* (1747 年)，*Misogyne* (1748 年)，*Die alte Jungfer* (1749 年) の 4 作でもって，すでに，当時のドイツの詩人たちをしのいでいた．[1] それがここに継承されている．

ここには，また，あらたな，ほほ笑みとしかいいようのない笑いが，男爵令嬢の性格のなかに用意されている．（第 5 場）

„Das Fräulein: Warum verlassen Sie uns, mein Herr? Warum sind Sie hier so allein? Ist Ihnen unser Umgang schon die wenigen Stunden, die Sie bey uns sind, zuwider geworden? Es sollte mir leid thun. Ich suche aller Welt zu gefallen; und Ihnen möchte ich, vor allen andern, nicht gern mißfallen.
Der Reis.: Verzeihen Sie mir, Fräulein. Ich habe nur meinem Bedienten befehlen wollen, alles zur Abreise fertig zu halten.
Das Fräul.: Wovon reden Sie? von Ihrer Abreise? Wenn war denn Ihre Ankunft? Es sey noch, wenn Sie über Jahr und Tag eine melancholische Stunde auf diesen Einfall brächte. Aber wie, nicht einmal einen völligen Tag aushalten wollen? das ist zu arg. Ich sage es Ihnen, ich werde böse, wenn Sie noch einmal daran gedenken.
Der Reis.: Sie könnten mir nichts empfindlichers drohen.
Das Fräul.: Nein? im Ernst? ist es wahr, würden Sie empfindlich seyn, wenn ich böse auf Sie würde?
Der Reis.: Wem sollte der Zorn eines liebenswürdigen Frauenzimmers gleichgültig seyn können?“

令嬢の性格化は，メッツガーの指摘のように，[2] 会話にもちいられた文体上の技術にもとづく点がおおい．疑問詞の多用と副文章の回避とによって，質問好きの活潑な少女の印象をつよめつつ，同時に，質問形式が甘えとなって，女を感じさせる．

「令嬢：なんとおっしゃいまして？旅におたちになるのですって？…それではひどすぎます．もういちどそんなことをお考えになったら，わたし，わたし，きっとおこりましてよ．

旅人：そのお言葉ほど，手痛い (empfindlichers) 威嚇はございますまい．

令嬢：ないんですって？本気ですの？ほんとうなの，わたしがおこれば，あなたはいたみ (empfindlich) ますの？

旅人：愛らしい御婦人の (eines liebenswürdigen Frauenzimmers) の立腹に，われわれ (uns) どうして無関心でおれるわけがございましょう？」

„merklich“，„stark“ にかわる社交的表現としての „empfindlich“ が，令嬢には理解できない．„ein liebenswürdiges Frauenzimmer“ の語が男性一般 (uns) と対置され，普遍化されていることにもきづかない．「あなたのおっしゃられることは，からかいのようにきこえますわ…わたし，ちょっとかわいいのですって，みんなそういってくれますの…」少女は有頂天になる．年わかく，まだ社交界にそまらない可憐さに，はじめて愛を知ったものの無器用さに，ほほ笑まずにおれない．

文体上の技術に，機知もくわわる．第 13 場で，令嬢は侍女のリゼッテに旅人への愛をうちあける．

「リゼッテ：…ただ，もう 2 つ 3 つお年を召してられないのが，残念ですわ．すぐにまとまるかもしれないお話ですのに．

令嬢：あら，年令の点だけですの，それなら，パパが 2 つ 3 つふやしてくださるわ．反対しないことよ．

リゼッテ：いいえ，わたしにもっといい考えがあるの．わたしの年を 2 つ 3 つあなたにあげる．そうすれば，どちらも助かるわ．わたしの方はもう年のとりすぎではなし，あなたは若すぎることもない．

令嬢：それもそうね．それがいいわ！

リゼッテ：ほら，お客さまの従僕がきました．あの方とお話があるの．なにもかも，あなたのことがうまくゆくようにと—ふたりっきりにしてちょうだい．—どうぞ，あちらへ．

令嬢：でも，あのこと忘れないでね．年令のこと－－きこえていて，リゼッテ？」

かわいい仔犬たちがじゃれあうのをみるように，少女のすがたは無邪気にいきいきとして，たのしい．

レッシングは喜劇のエネルギーを継承しながらも，従来とことなって，登場人物の性格にリアリティのある形象をもとめていた．クルムや令嬢の性格化に，そのよき例をみることができる．このあらたなるもの，リアリティへの模索は，とりわけ，人物の設定法の変化にあらわれている．

（次号へ）

注

1) Vgl. Mann, Otto: *Lessing*. 2. Aufl. Hamburg 1961 S.190.

2) Vgl. Metzger, Michael M. : *Lessing and the Lauguage of Comedy*. Hague 1966 S.97f.